

とやま 保険医新聞

2013年 10/15 第356号
富山県保険医協会
富山市桜橋通り6-13、フコビル11階
☎(076) 442-8000、FAX 442-3033
発行人 矢野博明
(年間購読料6,000円・一部500円)

主な記事

- (2面) 歯の県条例素案に対する協会のパブコメ
- (3面) 石井志保子氏の講演要旨
- (4面) 政策解説：社会保障制度改革国民会議
- (5面) 「報告書」を読む
- (6面) 接遇セミナー講演要旨②
- (7面) ウーマンズアイ⑩ 経営税務電話相談



講師の綿谷修一先生



司会的小林岳志理事



会場：ホテルグランテラス富山

第五回 歯科訪問診療研究会 を開催 在宅医・多職種と連携した歯科訪問診療

金沢市・綿谷修一先生を迎えて

九月二十日、協会と富山県在宅医会の共催で、歯科訪問診療研究会を開催し、三十五人が参加しました。

今回は「在宅医・多職種との連携」をテーマに、金沢市で三十五年にわたり歯科訪問診療を行なう綿谷修一先生を講師に迎え、自身が議長を務める金沢在宅N S T経口摂取相談会の取り組みも交えてお話しいたされました。

講演後、県内で在宅医療に取り組む医師と歯科医師ケアマネジャーが登壇して、顔の見える連携をどのようにして作るか、どのような役割が歯科に求められるかなど、参加者とともにフロア討論を行いました。

討論では、中川彦人県在宅医会会長が、「ある地域における特別な取り組みではなく、普遍的なものにしていかなければならない。」と述べ、広く歯科の参加を訴えました。(詳細は次号)

第4回 女性部企画

数学者として 母として 妻として



東京大学大学院 数理科学研究科教授 石井 志保子 氏



ユーモアあふれる石井先生のご講演に、67人の参加者が聞き入りました

協会は九月一日、第四回女性部企画を開催しました。当日は女性の医師・歯科医師二十七人を含む、六十七人が参加しました。最初に、井本産科婦人科医院院長の井本正樹先生に「子宮内膜症と生理痛について」と題して講演いただきました。(五面参照)

第一部は、東京大学大学院教授の石井志保子氏を講師に、特別講演「数学者として、母として、妻として」を開催しました。数学者を志すこととなった幼い頃の話を子育てしながらも数学者として社会的に果たすべき役割を強く意識し研究を続けてこられた話など、研究者として、女性として、輝き続けている石井氏の講演に参加者は熱心に聞き入っていました。

第二部の女性医師・歯科医師交流会では、美味しいランチをいただきながら、参加者同士で楽しく懇談をしました。参加者スピーチでは、講演の感想や日頃抱えている悩みや思いなどを話していたとき、終始和やかな雰囲気での交流会となりました。

参加者からは、「石井先生のお話はとても楽しく感動した。もっと聞きたかった」「今後の企画にもぜひ参加したい」などの声が寄せられました。なおこの企画は協会とイーザイ(株)の共催で開催しました。

女性医師・歯科医師交流会で



横田力初代会長が逝去

保険医協会の初代会長で、富山市の特定医療法人財団博仁会横田病院理事長、横田

力(よこた・つとむ)先生が八月十五日、八十五歳にて逝去されました。

故横田先生は、昭和五十四年十一月の設立総会で初代会長に就任されました。当時は薬価差問題、差額ベッド、指導・監査などで医師への風当たりが強くなり、八十年代の医療費抑制策が本格的に始まるころとする時代の中、組織の先頭に立って保険医協会活動を支えてこられました。また趣味の鉄道写真は晩年まで旺盛に続けられ、協会主催の『保険医作品展』では多くの方が先生の力作を楽しみにしていました。

安らかに眠りください

相談役(二代会長) 田中 悌夫

昭和五十二年頃、厚生省や健保連などの支払側の強大な勢に喘ぐ保険医側。緊迫した

医療情勢のもと、行政の下請け機関に墮した医師会に飽き足らない開業医の集団は、全国各地で保険医の権利と生活を守るのを旗印に掲げて保険医協会設立に立ち上がりました。五十四年発足の富山協会では横田先生が会長に就任されました。しかしその頃の協会は活動団体としての基盤が甚だ弱いものでした。この協会揺籃期に果たされた横田先生の尽力は、極めて大きいものがありました。対外的には「会」としての体面を保ちながら、内部的には脆弱な協会の財政の後ろ盾として、とても大きな存在でした。

富山県保険医協会は設立以来三十数年、会員数千二百人を越える一大勢力に成長しました。設立当時、大変なお世話を戴いた横田力先生、安らかに眠りください。



「編鐘」の音色に魅せられた。場所は高岡市の關野神社。編鐘(へんしょう)とは、三千年以上昔の中国の祭儀用の青銅製の楽器で、鐘を音高の順に並べ吊り下げたものだ。

日本に伝えられたのは十三世紀。当時の編鐘が残っているのは、日光東照宮が唯一で、これを日本独自の編鐘として蘇らせたのが、高岡市の「久乗編鐘」である。これは、寺院や家庭で仏具に使うお鈴(おりん)を高岡銅器の伝統ある鋳造方法で仕上げたものだ。温かく、何かに見守られているような余韻のある美しい音色は、脳波にα波を発生させ、癒し効果のある1/fゆらぎを含むことが日本音響研究所の分析で証明されている。高岡市では、小中学校のチャイムや高岡駅の発車音としても利用されている。

さて、その日本の編鐘をオリンピックで紹介したいと期待を込めて話すが先の關野神社の宮司酒井晶正氏である。お鈴(おりん)だけにオリンピックでと笑顔だ。二〇二〇年東京オリンピックへの「期待感」は人を前に動かす原動力となる。国政、世界情勢、問題は色々あるが、個人の期待感を大事にしたい。二〇二〇年、日本国民が、これをただの通過点にせず、目標点であり、出発点となるよう願っている。

(Y・F)